ギニア・ビサウのキリオル語の TMA システムについて[1]

Sobre o Sistema TMA de Kiriol da Guiné-Bissau

市之瀬　　敦
Atsushi ICHINOSE

1. はじめに

本稿の目的は，西アフリカのギニア・ビサウで話されるキリオル語（Kiriol)[2] の TMA システム（TMA とは Tense（時制）・Modality（法）・Aspect（相）のこと）を，他のクレオル諸語，基層語（西アフリカ諸語）あるいはヨーロッパ諸語の TMA システムと対比させながら考察することである。

時制・法・相という，動詞の文法範疇を示す TMA システムをなぜ本稿で取り上げるかといえば，接触に関与した言語の違いに拘らず，世界中のクレオル諸語の TMA システムがどれも非常に類似した構造を持ち，さらに，クレオル諸語と非クレオル諸語の TMA システムを比較した場合，両者が全く異なることが明かで，それ故，TMA システムがクレオル諸語の一大特徴と考えられ，ピジン・クレオル諸語研究において重要なテーマの一つとなっているからである。

なお，クレオル諸語の TMA システムの特徴をごく大ざっぱにいえば，それは，クレオル諸語の動詞には屈折変化がなく，時制・法・相の文法範疇が動詞に直接付加される小辞によって標示されるということである。

キリオル語は，このようなクレオル諸語の TMA システムの特徴を共有しており（後で見るように，小辞の位置に関し例外がある），従って，キリオル語の TMA システムを考察することはクレオル諸語一般の TMA システムの理解にも役立ち，また，クレオル諸語と非クレオル諸語を比較した場合，TMA システムがクレオル諸語の一大特徴であることを考慮すれば，それはクレオル諸語の本質を理解する上でも有益だといえよう。キリオル語というポルトガル語語彙クレオル語の TMA システムを考察する価値は決して小さくはないのである。

2. キリオル語の TMA システム

2.1. 無標示

TMA システムに重点をおきながら世界中のクレオル諸語を幅広く比較，検討し，言語の起源に関する仮説を立てたビッカートンによれば，クレオル諸語の動詞に関しては，状態動詞と動作動詞[3] の区別が重要で，TMA 標示形が付加されない場合（すなわち動詞が無標示で用いられる場合），前者は現在，後者は過去を表すという。

クレオル諸語の動詞がこのような性質を持つことは，他の研究者によっても指摘されており，次の例から明らかになるように，キリオル語でも無標示の場合，状態動詞は現在，動作動詞は過去を表すと見なすことができる。

状態動詞：

①N　<u>pensa</u>　kuma Gine　i　bunitu.[4]
1SG 思う　CONJ ギニア　COP 美しい
私はギニア・ビサウは美しいと<u>思う</u>

動作動詞：

②N bay Bisau.

行く ビサウ

私はビサウに行った

しかし，クレオル諸語の動詞が状態動詞と動作動詞に二分され，無標示の場合，前者は現在，後者は過去を表すという指摘に対し，これまで二つの疑問が提示されている。一つは，無標示の動詞が示す時制は状態動詞・動作動詞の区別によってではなく，むしろ文脈によって決定されるのではないかというものである。確かにキリオル語でも，談話全体の時間の焦点が過去に当てられているとき，無標示の場合，動作動詞・状態動詞ともに過去を表し，これら二種類の動詞の区別が曖昧になり，従って，動詞の時制の決定は談話の時間の焦点がどこに当てられているか，つまり文脈によるのではないかと考えられないこともない。また，多くのクレオル諸語の基層語であり，クレオル諸語と同じく動詞の屈折を持たない西アフリカ諸語において無標示動詞の時制が文脈によって決定されるという事実も，クレオル諸語の無標示動詞が示す時制の決定要因として文脈が重要であることを示唆しているように思われる（主にナイジェリアで話されるヨルバ語で，mo jẹun は文脈により「私は食べる」とも「私は食べた」とも解釈できる）。[5]

いま一つの疑問は，無標示の際，状態動詞と動作動詞の間に見られる時制の違いは，クレオル諸語の TMA システムに組み込まれたものではなく，実は単なる翻訳上の問題ではないかというものである。つまり状態動詞は元々現在を表すわけではなく，動作動詞も元々過去を表すわけではなく，それぞれそのように訳されやすいということにすぎず，[6] 従って，無標示動詞の（翻訳されたときの）時制の違いによって，クレオル諸語の動詞を二種類に大別する必要はないのではないかというのである。

この二つが，クレオル諸語の動詞は状態動詞と動作動詞に分けられ，無標示の場合前者は現在，後者は過去を表すという原則に対する疑問であるが，まず最初の，クレオル諸語の無標示動詞の時制は文脈により決定されるのではないか，という疑問は重要な点をついているように思われる。なぜなら，すでに見たように，キリオル語でも文脈が時制を決定する状況が存在するからである。しかし，前後関係を抜きにして（すなわち文脈なしに）上記の例文①②を耳にしたとき（あるいは目にしたとき），キリオル語の母語話者は必ず①を現在，②を過去と解釈し，その逆に解釈することも，両文が同じ時制を示すと解釈することも決してない。従って，無標示の際，状態動詞と動作動詞の違いが時制の決定に関し重要な役割を果たしていることは間違いなく，文脈だけを無標示動詞の時制決定要因と見なすことはできない。むしろ，文脈は時制の決定要因の一つで，状況によっては（例えば，談話の焦点が過去に当てられている場合）決定的な役割を果たすことがあると考えた方がよいのではないかと思われる。

一方，無標示の場合，状態動詞と動作動詞の時制が異なるように見えるのは実は翻訳の問題にすぎないという指摘は誤解に基づいていると考えられる。というのは，①は現在，②は過去に訳されやすいのではなく，上記に触れたようにキリオル語の母語話者には必ずそのように解釈されるからである。すなわち，彼らは状態動詞が表す行為は現在と接点を持つと解釈しているが，動作動詞が表す行為は過去に起こったもので，しかも現在とはつながりを持たないと解釈しているのである（つまり，過去だと捉えている。なお，過去においてすでに起こった行為が現在とのつながりを持つことを表すのは完了標示形 ja である。この ja については2.5. を参照）。

このように，無標示の際，状態動詞と動作動詞の時制が異なるのは，翻訳の問題ではなく，この二種類の動詞の区別が（時制の違いを伴い）キリオル語の TMA システムに組み込まれているからであり，従って，キリオル

語の例だけをもってクレオル諸語全体に一般化することはできないにしても，キリオル語に関しては，状態動詞と動作動詞の区別，そして，無標示の際前者は現在，後者は過去を表すという原則はやはり重要だと思われる。

2.2. 前時制（Anterior Tense）標示形 ba

前項であげた例文①②の動詞に前時制標示形 ba を付加すると（多くのクレオル諸語で前時制標示形は動詞に前置されるが，通常キリオル語では動詞に後置される），状態動詞の場合は過去，動作動詞の場合は過去以前の過去を表す。すなわち，前時制標示形は無標示動詞が表す時制より一段階以前の時制を示すのである。

状態動詞：

③N pensa ba kuma Gine i bunitu.
　　T

私はギニア・ビサウは美しいと思っていた

動作動詞：

④N bay ba Bisau.

私はビサウに行ってしまっていた

前時制標示形はほぼ全てのクレオル諸語に見られるが，それと類似した機能を持つ形式が西アフリカ諸語にも存在し，それ故，前時制の存在を基層語（すなわち西アフリカ諸語）からの影響と見なす者もいる。

キリオル語の ba に関しては，基層語からの影響を考慮することは特に重要であると思われる。というのは，キリオル語の基層語の一つと考えられるマンジャコ語（キリオル語が形成されたギニア・ビサウ北部カシェウ一帯で話される言語）に，やはり動詞の直後に置かれる前時制標示形があり，しかも，その形までがキリオル語と同じ ba（「終わる」を意味する動詞でもある）だからである。両言語の前時制標示形が同じ形式を持ち，同じ位置に置かれる（ただし，後述するようにキリオル語の ba は文末さらには文頭にも置かれる）という事実だけで，キリオル語の前時制標示形 ba がマンジャコ語の前時制標示形に由来すると断定することはできないにしても（以下見るように，ba の起源と考えられる形式が他にもある），その機能も形も全く同一であることを考慮すれば，マンジャコ語の前時制標示形がキリオル語の前時制標示形に何の影響も及ぼしていないとは考えにくい。

マンジャコ語の ba がキリオル語の前時制標示形 ba の起源だと断定できない理由として，それ以外にも ba の起源と考えられる形式がいくつかあることを指摘したが，それらの形式とは，ポルトガル語の estava（be 動詞 estar の不完全過去形）の最終音節を基にする形，[7]「終わる」を意味する kaba（ポルトガル語の acabar に由来）の，アクセントのない第一音節が落ちた形（マンジャコ語の ba が「終わる」を意味することに注意），そしてポルトガル語の動詞不完全過去形の活用語尾 -va（/v/→/b/ については注(7)参照）である。前時制標示形 ba の起源として，マンジャコ語の ba も合わせ以上四つの形式が考えられるが，そのうちのどれか一つだけを ba の起源と見るべきなのか，四つのうち二つあるいは三つの形式が相互に作用し合って形成された形式が ba であると見るべきなのか，それとも，四つの形式全てが相互に作用し合って形成された形式が ba であると見るべきなのか，現時点では結論は出せず，ba の起源に関しては今後さらなる調査が必要である。

すでに触れたように，一般的にクレオル諸語の前時制標示形は動詞に前置されるのに対し，キリオル語の ba はその位置を占めることはなく，動詞直後，さらに文末あるいは文頭に置かれる。従って，④は，N bay Bisau ba あるいは Ba N bay Bisau とすることもできる（ただし後者は一部の話者にのみ見られる構造である。また，④の bay と ba の間にポーズがないのに対し，この両文の場合前者では Bisau と ba，後者では ba と N の

間にポーズがある)。

ba の特殊性はその置かれる位置だけでなく，他のクレオル諸語の前時制標示形と異なり，名詞と共起できる点にも見られる (i pursor ba.「彼／彼女は先生 (pursor) だった」)。

無標示動詞が示す時制より一段階以前の時制を表す点で ba は他のクレオル諸語の前時制標示形と変わらないが，文中に占める位置が動詞の前でないこと，名詞との組み合わせが可能なこと，この二つの点を見れば，他のクレオル諸語の前時制標示形と比べ，ba は例外的な前時制標示形だといえよう。

2.3. 進行・未来 na

na は動詞の直前に置かれ，進行あるいは不確かな未来[8] を表す。

進行：

⑤N na bibi yagu gosi.

A 飲む 水 今

私は今水を飲んでいる

不確かな未来：

⑥ amaña N na bay Bisau.

明日 M

私は明日（おそらく）ビサウに行くだろう

進行なのか，不確かな未来なのか，na の意味の決定には，⑤⑥からわかるように，副詞が重要な役割を果たす。また，副詞がない場合は文脈によって判断することができ，現実の談話においては，na が進行，不確かな未来のどちらを表しているのかわからないなどということはまず起こらない（⑤から gosi を取ると，「飲んでいる」とも「飲むだろう」とも解釈可能だが，文脈によってどちらを意味するのか判断できる)。

進行と未来が同じ形式で表される言語がキリオル語以外にも数多く存在することが知られているが，そうした言語ではほとんどの場合，現在進行形が未来を表し，例えば英語でも I am leaving tomorror は未来を表す（進行形が未来を表しうるのは，現在進行中の行為は未来においても続いている可能性が大きいからだろう)。現在進行形が未来を表すようになった言語が多いことから，キリオル語の na も元々は進行標示形で，後から未来の意味を併せ持つようになったのではないかと考えられるが，実際にそうなのか否か見るために，以下，na＋動詞という構造の形成過程をたどってみよう。

キリオル語には na の他に，sta na というやはり進行を表す構造がある。その二つの要素 sta と na がそれぞれポルトガル語の be 動詞 estar，場所を示す前置詞 na (em＋a) に由来するように，これは本来場所を表す構造であったが（例：i sta na kasa「彼／彼女は家 (kasa) にいる」)，世界の数多くの言語が，sta na (be at) のような，場所を示す構造を進行を表す構造として利用するようになったのと同様に（例えば英語の進行形は He is at home→He is at working→He is working という過程を経て形成された)，sta na も進行を意味する構造となった (i sta na kume「彼／彼女は食べて (kume) いる」)。さて，sta na は動詞を伴い進行を表すようになったのだが，進行という一つの機能を標示するのに二つの要素は必要ない。そこで，キリオル語は be 動詞 sta を落とし，前置詞 na だけを進行標示形として残す構造 (i na kume) を用い始めた（どの要素を残すかは言語によって異なり，英語は逆に be 動詞を残し，前置詞 at を落とした—上記例文参照)。

このように，na＋動詞という構造は進行を示す構造として形成されたのであり，従って，他の現在進行形と同

じく，未来の意味はやはり後から獲得されたと考えられるのである。なお，現在でも sta na と na（もちろん進行の意味で）は共に使用されるが，sta na より na の使用頻度の方が高く，前者から後者への移行が進みつつあることを示唆している。[9]

na は前時制標示形の ba と組み合わされると，過去における進行あるいは条件法を表す。

⑦N　na kuri ba.
　　走る
私は走っていた

⑧Si　bu　misti ba, N na kuri ba.
もし　2sg　望む
もし君が望むなら，僕は走るのだが

進行標示形と前時制標示形が組み合わされたとき過去進行，未来（非現実）標示形と前時制標示形が組み合わされたとき条件法が表されるのは，キリオル語だけでなく，他のクレオル諸語でも同様である。

不確かな未来を表す na よりさらに確かさの度合いが低い未来を示す構造が存在する。それは na と，「来る」を意味する動詞 bin を組み合わせた na bin という構造である（西アフリカ諸語では「来る」を意味する動詞が未来標示に使われることが多く，bin の使用は基層語の影響とも考えられる。なお，na bin には進行の意味はない）。

⑨N　na bin　tene　fiju.
　　M　　持つ　息子／娘
私は（ひょっとしたら）子供を生むかもしれない

なお，母音間の -b- の脱落[10] により na bin から nain，さらに a の脱落により nin が形成され，この最後の形式が現在若い話者を中心に，TMA システムの中に新しい未来標示形として文法化されつつある。

2.4.　習慣と未来 ta

ポルトガル語の estar に由来すると考えられる標示形 ta は習慣あるいは確かな未来を表す。

習慣：

⑩N　ta bay mar.
　　A　　海
私はいつも海に行く

確かな未来：

⑪N　ta tene fiju.
　　M
私は（必ず）子供を生むだろう

副詞もなく，文脈もはっきりとしないため，⑩は確かな未来（「私は必ず海に行くだろう」），⑪は習慣（「私は繰り返し子供を何人も生んでいる」）をそれぞれ表すと解釈することもできる。

しかし，実際の談話においては，習慣，確かな未来そのどちらを表しているのかは，副詞あるいは文脈によって決定されるため，各文を解釈する上で誤解が生ずることはない。

習慣と未来を共に表す形式は，前項で見た na ように進行と未来の意味を併せ持つ形式と同様，クレオル諸語

だけでなく，世界中の数多くの言語に見られる。その形式は，ほとんどの場合，元々は習慣を表す形式で，未来の意味は後から持つようになるのだが，そうした意味の拡張が起こる理由は，習慣的行為は未来においても行われている可能性が高いからだろう。

このように，キリオル語は習慣を表す標示形により確かな未来，前項で見たように，進行を表す標示形で不確かな未来を示す。習慣そして進行という継続的行為を表す標示形により未来も示すクレオル語はキリオル語以外にも数多く存在するが，習慣と進行がそれぞれ独自の標示形を持つ点で（多くのクレオル諸語は習慣と進行を同一の標示形で示す），しかも，その二つの標示形が異なる種類の未来を示す点で，キリオル語はクレオル諸語の中で例外的な存在だといえよう。[11]

なお，クレオル諸語に進行，習慣そして未来の意味を併せ持つ形式があるのは，やはり同じ機能を持つ形式が存在する西アフリカ諸語との接触により，その形式をそのまま取り入れたわけではないにしろ，そこから何らかの影響を受けたからではないかという指摘もある。

na と同様，ta も前時制標示形 ba と組み合わせて用いることができ，過去の習慣あるいは条件法を表す。

⑫N ta bay ba mar.

私はいつも海に行った

⑬Si bu misti ba, N ta tene fiju ba.

もしあなたが望むなら，私は（必ず）子供を生むのだが

同じ条件法の文である，前項で見た⑧と，この⑬を比べると，⑬の動詞（tene）が表す行為が実現される可能性の方が，⑧の動詞（kuri）が表す行為が実現される可能性よりも大きい。このような差がでるのは，na と ta が表す確かさの度合いの違いが，そのまま条件法の文にも反映されるからだと考えられる。

2.5. 完了 ja

ja はポルトガル語の já（すでに，もう）に由来し，過去に起こった行為の結果が現在にも適用できることを表す（従って，過去時制とは異なる）。ja は動詞の直後あるいは文末に置かれる。

i bay ja.
　　A

彼／彼女はすでに行った

3. 最後に

クレオル諸語と非クレオル諸語の構造上の違いは TMA システムに最も顕著に現れるということには 1. で触れたが，それは逆にいえば，TMA システムが上層語の影響で変化し始めると，上層語に対する，そのクレオル語の自律性が危機に瀕するということでもある。キリオル語に関していえば，以上見たその TMA システムは，時制・法・相を動詞の屈折や助動詞によって示すポルトガル語の TMA システムと大きく異なり，脱クレオル化はまだ始まっていないように思える。ポルトガル語から及ぼされる影響により，現在，その他の部分では脱クレオル化が進行していることは事実だが，TMA システムはまだキリオル語らしさを保っており，従って，ポルトガル語に対しキリオル語の自律性はまだ損なわれていないということができるだろう。

このように，キリオル語の TMA システムには上層語（＝ポルトガル語）の影響はまだ見られないが，基層語（ギニア・ビサウ及び近隣諸国で話される諸言語）から取り入れられたと考えられる構造は存在する（例えば，

2.2. で見た前時制標示形 ba)。ただし，それが本当に基層語から取り入れられたものなのかどうか判断するには，ギニア・ビサウそして近隣諸国のどの言語がキリオル語の形成に関与したのか，形成以後キリオル語がこれまでギニア・ビサウそして近隣諸国のどの言語と接触してきたのか，それら全ての言語がどのような構造を持つのか（そして，持っていたのか）が明らかにされねばならないが，これまでこうした調査はほとんど何もなされていないといえる。基層語に関しては，今後早急に本格的な調査が行われる必要がある。

キリオル語を含むクレオル諸語の多くは，上層語と基層語の板挟みという特殊な社会言語学的状況にあるため，それらの言語から及ぼされた影響による変化ばかりが取り上げられるが，例えば nin（2.3. 参照）のように，外部からの影響ではなく，内的要因による変化の結果形成された文法要素が TMA システムを変え，豊かにした例があることも忘れてはならない。すなわち，キリオル語などクレオル諸語の構造は決して外部からの影響だけによって変化するわけではないのである。

注

(1) 本稿は1991年5月18，19日に上智大学で開催された日本ロマンス語学会第28回大会における口頭発表「ギニア・ビサウのキリオル語の TMA システムについて」の内容に加筆，訂正を行ったものである。

(2) キリオル語は，十五世紀末から十六世紀にかけ，現在のギニア・ビサウの北部に位置するカシェウ近郊で形成されたポルトガル語語彙クレオル語で，今日，同国の推定人口およそ百万人の約四割の人々により話される。公用語であるポルトガル語の話者数が推定人口の一割にも満たないのに対し，話者数ではポルトガル語を大きく上回るキリオル語は国語という地位を与えられているだけで，新聞・ラジオ・テレビ・学校などでの使用は限られている。なお，ギニア・ビサウでは，キリオル語でなく，クリオル語（Kriol）と呼ぶ人もいる。

(3) 状態動詞は物事の有り様に言及し（例えば「好き」，「望む」，「考える」など），一方，動作動詞は一回きりの行為を表す（「行く」，「出発する」など）。

(4) 本稿で使用するキリオル語のデータは全て，リスボン在住のギニア・ビサウ人ジョアン・メンドンサ氏との面接調査（1988年3月から1989年10月まで続いた）から収集したものである。また，表記はギニア・ビサウ教育省が1987年に提案した正書法に基づく。

(5) ここでヨルバ語を例にとるのは，それが西アフリカ諸語の中では比較的よく研究された言語だからである。全ての西アフリカ諸語がヨルバ語と同じ構造を持つわけではないが，その多くは同一の語族（ニジェル・コルドフアン語族）に属し，この語族に属する言語の間に数多くの共通・類似点が存在することが知られている。

(6) 「状態」はその終わりが限定しづらく，よって，その「状態」が現在まで続いていると考えられやすく，「動作」はこれから起こる場合より，すでに起こった場合の方が話題になることが多く，それ故，状態動詞は現在に，動作動詞は過去に訳されやすいと考えられる。

(7) クレオル諸語の前時制標示形はヨーロッパ諸語の Be 動詞の過去形に由来することが多く，また，サントメ・プリンシペのポルトガル語語彙クレオル語の前時制標示形がポルトガル語の estava に由来する tava であることを考慮すれば，同じポルトガル語語彙クレオル語であるキリオル語の前時制標示形がやはり estava に由来すると考えることもできるだろう。なお，ba に至るまでの変化の過程は estava→taba→ba と考えられる（/v/→/b/ という変化はギニア・ビサウの諸言語に /v/ が存在しないためである）。

(8) ピジン・クレオル諸語研究の分野では，未来は Irrealis（非現実）と呼ばれ，法（Modality）として扱われる。

(9) キリオル・フンドゥ（深いキリオル語）と呼ばれる，ポルトガル語の影響が少なく，キリオル語の古い特徴を多く残している変種において na より sta na の方が使用頻度が高いことは，sta na が na より古い形式であることの傍証となろう。

(10) キリオル語では母音間の -b- が脱落する傾向がある。

(11) 習慣と進行が異なる標示形で示され，しかも，それが未来も表すという点で，キリオル語はカボ・ベルデのポルトガル語語彙クレオル語と似ているが，後者のクレオル語において確かな未来と不確かな未来の区別が存

在するか否かは明かでない。また，確かな未来と不確かな未来が別々の標示形で表されるという点で，Ndjuka（スリナムの英語語彙クレオル語）と同様であるが，この英語語彙クレオル語の場合はどちらの標示形も元々未来標示形であり（一つは英語の go，いま一つは shall に由来する），継続的行為を表す標示形は別にある。

参考文献

D. ビッカートン「クレオル諸語」『サイエンス』昭和58年。

――――『言語のルーツ』昭和60年　大修館書店。

Heine, B. Claudi, U. and Hünnemeyer, F. (1991) *Grammaticalization.* University of Chicago Press.

Holm, J. (1988) *Pidgins and Creoles. 2Vols.* Cambridge University Press.

Macedo, Francisco. (1988) O Problema das Línguas na Guiné-Bissau. Bissau.

Mühlhäusler, P. (1986) *Pidgin & Creole Linguistics.* Basil Blackwell.

Romaine, S. (1988) *Pidgin and Creole Languages.* Longman.